京都秋期福音特別集会（１）

パウロ的実存の秘密α

――ガラテヤ書第１～３章――

１９８９年10月28日（京都）
小池辰雄

最大の例外者　わがパウロ　キリストに直結　恩恵と平安　内在関係の神秘の世界　異なる福音　まことの福音　信頼には信頼を　自然法、道徳法、神法　我は汝を贖った　ざるを得ない相互帰入　キリストの義を賜る　新しき律法　ガラテヤ2･20とマタイ5･3は同じ　一如的な現実

【ガラテヤ1】

1 **人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、2 及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。3 願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。4 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。5 願くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アァメン。**

6 **我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。……**

【ガラテヤ2】

16 **人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。17 もしキリストに在りて義とせられんことを求めて、なお罪人と認められなば、キリストは罪の役者なるか、決して然らず。18 我もし前に毀ちしものを再び建てなば、己みずから犯罪者たるを表す。19 我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。20 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり……**

【ガラテヤ3】

1愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。2我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。3汝らは斯くも愚なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。4斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。5然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。……

●最大の例外者

私は、ドイツ文学界でもキリスト教学会でも学校でも、またその他いろいろな所においても、どうも、どの範疇にも入らない例外者である。あなた方は、この例外者の告白をお聞きになるというのでありますので、あなた方もあるいは例外者になるかも知れない。

ところが、最大の例外者はキリストであります。その最大の例外者が世界の歴史を背負っている。この驚くべき例外者が、パウロをとっ捕まえた。私はパウロについては語りません、パウロと一緒に告白します。ガラテヤ書1章、

1人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、

大変な宣言ですね。こんな素晴らしい自己紹介はない。パウロこそは正に例外者です。他の直弟子たちは、キリストと地上において御飯を一緒に食べたり、一緒に歩いたりした。ところが、パウロはそういう経験は一つもない。むしろ、反ユダヤ教の新興宗教のイエスをけしからん、そのキリスト教を信ずる者をとっ捕まえて牢屋に入れて、死に至らしめるようなことも平気でやるような、正に彼は熱心党中の熱心党なんです。ユダヤ教の火のような奴です、サウロというのは。ギリシャの学問も修めているし、ユダヤ教の律法もよくこなしているし、ガマリエルの門下では最優秀の弟子であった。だから、およそユダヤ教に反するものはまことにけしからん、不倶戴天の宗教である、やっつけろ、というわけです。正にパリサイ人の権化なんだね。

使徒行伝5章の所を見ると、

「**32我らは此の事の証人なり。神のおのれに従う者に賜う聖霊もまた然り』**

33かれら之をききて怒に満ち、使徒たちを殺さんと思えり。34然るにパリサイ人にて凡ての民に尊ばるる教法学者ガマリエルと云うもの、議会の中に立ち、命じて使徒たちを暫く外に出さしめ、議員らに向かいて言う、35『イスラエルの人よ、汝らが此の人々に為さんとする事につきて心せよ、36前にチウダ起こりて、自ら大なりと称し、之に付従う者の数、おおよそ四百人なり

しが、彼は殺され、従える者はみな散らされて跡無きに至れり。37そののち戸籍登録のときガリラヤのユダ起こりて多くの民を誘い、おのれに従わしめしが、彼も亡び従える者もことごとく散らされたり。38然れば今なんじらに言う、この人々より離れて、その為すに任せよ。もしその企画(くわだて)その所作(しわざ)、人より出でたらんには自ずから壊(やぶ)れん。39もし神より出でたらんには彼らを壊る能わず、恐らくは汝ら神に敵する者とならん』（使徒5・32～39）

素晴らしいですね、さすがにガマリエルは。今の世界の文化文明は、みんな「人より出たもの」で、神から出ていない。科学のことにしろ、一切の職業的な業にしても。「民主主義」という――「神主」じゃないんだ――日本の民主主義は、そんなことでもってみんな好い気になってやっているが、神を無みしている民主主義なんて何だと。大体、本当の真理というものは、「主義」で限定することはできない。「無教会主義」なんて言っているが、それは、無教会も内村先生も歴史的な意味はありました。けれども、内村先生自身が、

「主義にこだわってはいかん」

ということも言っておられる。ところが亜流はダメなんだね。『聖書の研究』の雑誌をお書きになると、研究ばかりしている。いわゆる研究学者はいますよ――何も悪口言うわけじゃない――それはそれで結構です。しかし、聖書は、いくら研究してギリシャ語ができ、ヘブライ語ができ、いろいろな事情が分かっても、それで聖書の世界に入れるというわけじゃない。

●わがパウロ

ギリシャ文化の粋を身に付け、ユダヤ教の神髄を身に付けたパウロは大変なやつです。それが怒って迫害に及んだ。そのことは使徒行伝の13章、14章に出ています。そこでパウロは本当に懇切に告白している。

しかも、随分、ユダヤ人たちに迫害され妨害されたと書いてある。これは小アジアのガラテヤ地方のいろいろな所々を、四、五つの町を経歩いて、またそこをバックして、なお確かめて帰って来たという、パウロの第一回伝道旅行です。

今そういういきさつを概略お話しましたけれども、一番大事なことは、

「人よりに非ず、人に出るにも非ず」

といって、迫害していた時にダマスコ途上で天来の光に撃たれ、聖言に接した。

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

「あなたは誰ですか」

「キリストだ」

と。晴天の霹靂(へきれき)以上だ、霊撃された。ぶっ倒された。それで三日三晩、ものが食べれず、目が見えず、口がきけず、やっとアナニヤという人のところに連れられて行った。それは

もう、こういうのが来るからと、アニナヤという人にはちゃんと示されている。９章、22章、26章にも同じようなことが告白されている。パウロは本当にひっくり返された。これは言葉ではどうにもならない。霊的な力でもって、

「何ぞ我を迫害するか」

という懼るべき聖言をもってパウロを霊撃した。大変な方ですね、キリストは。

それへの道しるべとなったのが、ステパノです。パウロを思うときに、我々はステパノを忘れてはいかん。ルターを思う時は、火刑に処せられたフス、これを忘れてはいかん。さっきの讃美歌に、私は「わがステパノ」と書きました。ステパノのことを、

「ああステパノは偉かった」

では、しょうがないんだ。

「我々もステパノ魂を持たなくちゃいかん」

という、そういう気持で、「わがステパノ」と書いた。今回も「わがパウロ」です。あなた方一人一人が、「わがパウロ」というわけで、お聞きになってください。

キリスト教の歴史で、キリストはもちろん、完全な例外者ですが、第一人者は何といっても、パウロです。新約聖書の約三分の一がパウロの書簡です。これだけの艱難を突破することができたのは、正に御霊の力です。普通ならもうとっくの昔に倒れています。私なんか、パウロなんかととても比較になんかなりません。それでも、聖霊に在っては「わがパウロ」と言います。親しいから、「パウロさん」と呼ぶ。

「パウロさん、あんたが味方だから、いいよ。地上で皆に棄てられても大丈夫だよ、天の万軍が声援してくれるから」

なんてなわけだ。皆さんお一人お一人が、男でも女でも、本当の勇者になれますよ、このキリストをいただけば。キリストの証し人というのはそういうんだ。

●キリストに直結

私たちが、

「使徒たちの次元に帰れ」

と、やっているわけです。カトリックでもプロテスタントでもない。何も宗派を私は否定しているわけじゃない。カトリックにもプロテスタントにも、キリスト直結の方々がいらっしゃいます。そういう方には、もちろん私は敬意を表します。アッシジのフランシスなんて素晴らしい。どこのグループにいようが、問題はそのどこのグループだからじゃない。

「その人が本ものであるか」

ということが問題。本ものであるためには、キリストの直弟子のように、キリストに直結しなければダメだ。だから、私ははっきり言う。キリスト者というのは、ルター派とか何とか言うんじゃない。キリスト者はキリストのものなんだ、「クリスティアーノス」という

のはね。

パウロは、本当に上から直接にキリストにやっつけられて、ひっくり返されて、

「わが目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

ということになった。曠野に出て祈りました。十字架が出てきました。使徒たちに合うまで、まだ13年もかかっている。非常にじっくりとした準備をしたんですよ、彼は。完全に福音を、キリストの啓示によって受けとった。

「では、ユダヤ教と一体どこが違うんだ」

と、そのことをガラテヤの人たちに語っているわけです。せっかくそのことを語ったのに、ユダヤ人たちがやって来て、そいつをまたもとへ戻そうとしてゴタゴタしている。それでパウロは、このガラテヤ書を多分、第二回の伝道旅行のエペソで紀元40何年頃に書いたんでしょう。だから非常に戦闘的なんです。マルチン・ルターが宗教改革をする時にこのガラテヤ書が一番力になった。

あなた方は、私を通して、この福音の世界に大分の方はいらっしゃったが、しかし、「通して」だけじゃダメなんだ。やっぱり、あなた方一人一人が直接の体験を何らかの時に何らかの形で自分の本ものにしないと。だから、私が語るのもあなた方が聞くのも同じ次元のところにいなさるわけです。まぁ、私は歳を少しあなた方よりか取っているから、代わりにお話はしますけれども。

来年は伝道50年でね、また何を宣言するかわからない。来年のことは言わない。しかし来年は皆さんと、この福音のためにいよいよしたいと思います。それぞれのお仕事を通し、それぞれの生活を通してキリストの証し人となる。これだけが人生の目的です。やり方は何であっても構わない。

●恩恵と平安

2 **及び我と偕（とも）にある凡（すべ）ての兄弟、書（ふみ）をガラテヤの諸教会に贈る。** 3 **願（ねがわ）くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜（たも）う恩恵（めぐみ）と平安と汝らに在らんことを。**

パウロの書簡に、この

「恩恵と平安と汝らに在らんことを」

というのがよく出てくる。ああまた出てきたかなんて思っちゃダメだよ。

「恩恵と平安」

とは何か。「恩恵（めぐみ）」の中心は十字架であります。「平安」の中心は聖霊であります。だから、

「十字架と聖霊」

と言っているのと同じことなんだ、「恩恵と平安」とは。聖霊が来てなければ、本当の平安はない。この平安には力があるんです。どんな運命環境になろうが、人にどう扱われようが、

そんな事でびくともしない。これが本当の平安です。聖霊が来てなければ、この平安はない。キリストの恩恵は、私たちを罪から解放してくださった。十字架の贖罪です。

「十字架と聖霊と汝らに在らんことを」

と言った方が本当ははっきりしているんだ、「恩恵と平安」なんて言わないで。どこの牧師さんがそんなことを言うかね。私はもう、「十字架と聖霊」と言うと、やりきれないです、正直。身体が熱くなってきた。沈黙の雄叫びというのがある。黙って坐って、

「主さま！」

と全身でもって叫ぶ。直ちに力が来る。本当です！　私は、「お父さま」とは言わないんだ。私を贖って救ってくださったのは、キリストだから。キリストが、主の祈で「父よ」と言うと、みんな「父よ」と祈る。いや、「父よ」と祈って悪いわけじゃないですよ。ガラテヤ書にも書いてある、

「聖霊が来たから、『アバ父よ』と言えるんだ」

と。キリストは、

「お父さま！」

だよ、これは。キリストが「父よ」と叫び給えば、直ちに神のふところの中にいらっしゃる。私は「主さま」と言えば、主のふところの中にいる。それで何がわるいか。私は自分を偽らない。人にどう扱われようが、何と言われようが一向差支えない。キリストは棄て給わない。後でイザヤ書の素晴らしいところを引用しますけれども。

●内在関係の神秘の世界

4 主は我らの父なる神の御意(みこころ)に随(したが)いて、我らを今の悪(あ)しき世より救い出(いだ)さんとて、己(おの)が身を我らの罪のために与えたまえり。5 願(ねがわ)くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アァメン。

「今の悪しき世」、いつも「今の悪しき世」なんだ、何世紀になろうと。サタンの手下になっているからね。ペレストロイカとか何とかいって、この頃、ソ連の親玉もだいぶ自由主義的な要素がいよいよ強くなってきた。とにかく、どれにしろ、神に帰らなければ、キリストに帰らなければ。仏教徒なら本当に如来の世界に帰りなさいということです。

「帰入」、帰り入る。パウロはキリストの中に全く帰入しちゃったんだ。そして、「祈入」、祈り入る。入らなければダメなんです、外からでは。「パウロ的実存の秘密」というのは、そういう内在関係の神秘の世界です。これはダイスマンという人が『パウロ』という素晴らしい本を書いてますが、そこでも言ってます。シュヴァイツァーも、

「パウロは素晴らしいミスティーカー、神秘家である」

と言っている。「神秘主義者」と訳しちゃダメですよ、「主義」ではない。神との霊的な現実に入っていることを「神秘」というわけだ。あるいは「奥義」「ミステリオン」という。語

れないで黙っている世界です、このミステリーというのは。

●異なる福音

6 **我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。**

ここに「異なる福音」とあるね。それでは、

「どういうのが異なる福音か」

なんていって、何か詮索する必要は一つもない。「エテロン・ユーアンゲリオン」です――「エテロノミー」という言葉があるでしょ――福音から外れちゃっているもの。

私の気持では、例えば、現世的なご利益的なもの。キリストを信ずれば、

「家内安全、事業繁栄」

なんていって、この世的な幸福が来る、いわゆる「幸せになる」なんてね。よく、結婚の披露宴なんかで

「お幸せになりますように」

と言ってるが、何を言っているかと言いたくなる。ご利益的な、現世的なもの、これも「異なる福音」です。

それから、観念的な、いわゆる研究的なもの。これも「異なる福音」だ。無教会がただ観念とは言いませんよ。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、みんなそれぞれの役割を立派に果たされた方です。けれども惜しいかな、使徒たちの信仰からはズレてきた。「異なる」とまで言っては悪いかも知れませんが、しかし、あれじゃどうにもならん。賜物はいろいろです。しかし、人ひとりも本当に即座に病を癒すようなことは誰もしなかった。

手島さんや私を通しては、それが起きている。使徒たちは、使徒行伝のペテロやパウロは凄い。これでいいなんてところはないんですよ。いわんや福音書のキリスト、これはもう全く平伏すばかりです。

「こんな事があるだろうか?」

なんて言っているうちはダメです。

「本当に参りました!」

と平伏さなければ。天国を現じながら歩いていたんだから、キリストは。その聖言をもって、その業をもって。そして最後には十字架でもって。

「私はこの十字架で、お前の過去も現在も未来も全部、お前の自我というものを全部引き受けたんだ」

と。だから、パウロはそれを本当に受けとったから、

「われキリストと共に十字架せられたり」

と言った。

「十字架は罪の贖いである」
という命題を信じたってダメですよ。悪くはないけれども。それは観念だということです。
「私は自分なんか問題にしません。破れたままで結構です」
と、はっきり言えるかというんだ。
「もう少し立派になりましょう」
なんて、なぜ言ってるか。冗談じゃないよ。その代わり、本当にキリストを受けとれば、ものすごい光が来る、力が湧く、智慧が湧く、人を助ける。
それからもちろん、形式的な律法的なものもダメです。パウロの言葉にも、「こうしてはいけない」だの、「こうしろ」だのいろいろ書いてあるけれども、そいつを律法的に見たらダメ。キリストの聖言でもそうです。
「私がさせてやるぞ、大丈夫だよ」
と、そういうように響いてこなくては。新約をまた律法的に読んだらダメです。それで、一生懸命でやろうたってね、なかなかご苦労さんなはなしだ。またそれは律法の世界に入ってしまう。
社交的な、アクセサリー的なキリスト教もダメ。みんな「異なるもの」です。それから、他の宗教とごっちゃまぜにした、「シンクレティスムス」という混淆（こんこう）宗教、これもダメ。そうかといって、非常に排他的に
「自分のこれこそが、無教会主義こそが間違いない」
なんて言って、自己の信仰を是認しているようなもの。これはパリサイだから、これもダメ。

●まことの福音

では何がいいのか。礼拝の仕方はどうだっていい。洗礼したければ、洗礼もやったらいい。聖餐もやったらいい。ただそれが形式だったらダメ。
「十字架を本当に受けとっているか、聖霊のバプテスマを本当に受けているか」
と。この二焦点が本ものの世界です。自分でわかる。いわゆる自信ではない。キリストの救いとその光に、その生命に圧倒されている。そういう現実です。
「私の信仰は……」
なんて言っている世界じゃない。
「信仰なんて何もありません」
と。キリストでゼロにされた。そうすると、聖霊が来たら、この一者は――あなた方一人一人が掛け替えのない一者です――それは質的に無限大の内容を持っている。
「0＝1＝∞」（ゼロ＝1＝無限大）
こんな方程式は福音でなければ言えない。だから、本当にあり難くてしょうがない。何も要らないというんだから。聖書を読んでいると力が来てしょうがない。私も第十巻を自分

で読んでて力が来てしょうがない。聖書の縮図みたいだから。パウロが「まことの福音」と言っているその焦点はそうだと、私はパウロさんと一緒に言わざるを得ない。パウロも上から、

「そうだ！」

と言っているわ。ところで、パウロは今までは、

「律法の義については責むべきところなし」

と言って、いばっていたんだからね。ロマ書7章は、むしろ救われてから、彼は人間というものはこういうものだということが分かった。ユダヤ教の時は、ああいう矛盾は持っていなかった。パウロは自らをエリート中のエリートだと思っていた。それは霊的傲慢というんです。

●信頼には信頼を

面白いんだよ、この律法というのは。第十巻（『聖書は大ドラマである』）の54頁、「1月21日、22日」のところにこうある。出エジプト記20章、

3節（第一言）　汝にはわが面（かお）の前他神（あだしかみ）在らじ
4節（第二言）　汝汝（な）がため偶像を彫るまじ
7節（第三言）　汝が神実存主（エホバ）の名を空しくは言挙（ことあ）げすまじ
8節（第四言）　汝安息日を憶えてこれを聖とせよ
12節（第五言）　汝（な）が父を汝（な）が母を敬え
13節（第六言）　汝殺人せじ
14節（第七言）　汝姦淫せじ
15節（第八言）　汝盗まじ
16節（第九言）　汝その隣人に偽りの証（あかし）を立てじ
17節（第十言）　汝その隣人の家を貪らじ

という。「そういうことはしないねぇ」と言って、「すべからず」でなくて、

「そんなことはしない。私はお前たちを信じている」

と、こういうのが本当の律法なんです。律法のそれを

「すべし、すべからず」

と訳したのは、むしろ、誤訳とまでも言わなくても、派生した意味であって、ヘブライ語から言ってもそうなんです。そのことに、私は本当は非常にはやく気がついていたんですよ。ドイツの学者がそのことを書いたけれどもね。

断定している。だから、家でもお父さんお母さんが、

「お前、勉強しろ、勉強しろ」

なんて言ってはダメだよ。

「お前は勉強してるねぇ」
と言う。それがいいんだ。それで、怠けていたら、
「お父さんがちゃんとそういってくれたから、少しやらなくちゃいかん」
と思う。「勉強しろ」なんて言うと、
「少し遊んでやれ」
と逆になる。先生もそうです。
「お前たちはよく勉強する、それ故に試験はしない」
なんていう、そういう先生はいい学校だね。そういうような信頼関係でいかなければウソなんだよな。
「あの学校には試験はないけれど、みんなもの凄く優秀だ、楽しく勉強している、勉強を楽しんでいるな」
と。
「遊んでいる、楽しんでいる世界が一番人間らしい世界だ」
と、シラーが言っている。何でも、やっていてこれが楽しいな、面白いなとなったら、本ものなんです。苦しいことが多少あっても、それを乗り越えて行かなくてはね。
先生や親は子供を信頼して語っている。そうすると、子供もまたそれに対して信頼をもって応える。神さまはせっかく私を信頼をしてくださっているのに、その信頼に応えないから、おかしなことになっているわけですよね。神さまの方から信じているのに、
「どんなことがあってもお前を棄てないぞ」
と言っているのに、それを怪しんでたりしたら、冗談じゃないよ。

●自然法、道徳法、神法

自然の法、天然の法。天然自然は物理的法則で動いている。動物と植物の関係も素晴らしいことになっているのに、これを人間がいわゆる文明でもって勝手に使っているものだから、その秩序をおかしくした。
地球こそ「水星」ですよ、水の星なんだ。表面の三分の二が海でしょうが。遠くから見ると、地球は青く見えるというのは、海が青いからね。太陽からの距離が丁度いい所にあって、水ができて、それからいろいろ生物ができた。水は大事なものだ、生命の元素だからね。我々の身体だって大部分が水でしょ。地球なんていわないで、水星といったらいい。そういう自然の法則。
今度は、道徳の法則。道徳の法則を一番素晴らしく言っているのはカントだ。カントの「実践理性批判」は不朽の名作です。哲学の元祖はソクラテス、プラトン、アリストテレスだけれども。ところが、人間はこの道徳の法則をさんざん破っている。「社会、社会」と言っているけれども、社会的なものを健全にするためには、「個人」の道徳の法則がしっかりし

ていなければダメなわけです。

ユダヤ人は律法においてその法則の世界を賜ったとして、一生懸命でやったわけだ。けれども、神さまを忘れて、律法にこだわってしまっている。これがパリサイなんだ。パウロが一生懸命で律法をよく覚えてこれを実践していると自ら認じていた。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言って。ところが、これはとんでもない間違いだということが分かったんだ、キリストにひっくり返されてから。神さまを忘れて、そっちのけで律法にこだわった。律法の行為で、律法を行じていると自ら認じている。今のユダヤ人が相変わらずそうだもんな。それは本当は行き詰まりで、人を審くことになる。自分もひとつも生命の世界じゃないと、このことに気がついた。

「神法」、神さまの法則。生ける神の法は、パウロがロマ書8章で言っている通り。それに今度は切り替わったわけです。本当は法から法へ切り替わるんです。ユダヤ法から福音の法則に。このことは、ヤコブ書に書いてある。ヤコブ書1章25節、

「[25]されど全き律法、すなわち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行う者にして、聞きて忘るる者にあらず、その行為によりて幸福ならん。」（ヤコブ1・25）

「全き律法」「自由の律法」これが福音の世界なんです。キリストは自由の律法を歩いていた。神さまの聖言を受けとって、それで動いているのが、これが「自由の律法」なんです、聖言を聞きながら。旧約の預言者たちがそうです。それが本当の宗教の世界で、いわゆる祭儀的なものじゃないと。このことはキリスト自身も言ってらっしゃる、ホセア書の言で。モーセの律法を自ら実践していると任じて、キリストを迫害していたのをひっくり返された彼が、

「俺は間違っていた」

と祈っていて、現れたのが十字架です。なぜキリストが十字架に懸かったか。パウロは預言者のことをよく知っているから、イザヤ書53章が出て来たんでしょう。自分の霊的傲慢、これが彼にとって罪だと。ステパノを殺すことも可しとした。とんでもない殺人犯だ。本当は、今の法律だったら牢屋に入れられるところだ、パウロは。人殺しだから。

皆さんはそれぞれ才能を頂いている。そして、いろいろ勉強したり、仕事をしたりしていらっしゃる。それは相対的な善さです。それが質的に、質的な本当の善さに変わるためには聖霊が来なければダメなんです。だから、

「今までの律法の義なんかは塵芥の如く思う」

とパウロは一遍棄てた。けれども、パウロが頂いていたところのいろんな才能は、今度は神のものとして動き出した。これがもの凄く展開しはじめた。これがパウロの書簡です、また、パウロの伝道です。人をかたっぱしから助けた。いろんな艱難に遭っても絶対に死

ない。全部これは聖霊の証。十字架されたその先に来た聖霊の証です。

聖霊ほど力あるものはないですよ。人間の才能というのはそれぞれだからね。聖霊が来たから私は画家になれるかと、そうはいかない。頂いた才能はそれらしく伸びていくんだ、皆さん一人一人が。それでなかったら、みんながおかしなことになっちゃう。それぞれの善さというものは、ちょうど百花繚乱ということだ。私は桔梗だがあのバラみたいになりたい、なんてダメだよ。桔梗で結構なんだ。私は、キリストの山上の告白のところを歌（召団讃歌Ａ47「恵福なるぞ」1987/9/1作詞）にして、あの八つの花の名前にしたでしょ、それぞれの善さというものをね。

●我は汝を贖った

少し旧約を開こうかな、第十巻の「5月24日」のところ、ミカ書7章、

「7我神を仰ぎ瞻る。我はわが救の神を待ち望む。わが神は我に聴き給う。
8わが敵よ我につきて喜ぶ勿れ、我仆るれば起きあがる。幽暗に坐すれば神わが光となり給う。」（ミカ7・7～8）

「18誰か汝の如き神あらんや！　罪を赦し、その嗣業の遺れる者の不義を見過ごし給う者。永劫に御怒りを保ち給わず、愛憐を深く念とし給う者。19彼は再び我らを憐み、我らの不義を踏みつけ、我らの罪を海の底に投げ入れ給うなり。」（ミカ7・18～19）

「誰か汝の如き神あらんや」

という。「ミカ」という字は「誰か如き者あらんや」という字です。「ミカエール」というのは「誰か神の如くあらんや」という天使の名前です。凄い言葉だね、預言者は。

「いいよ、大丈夫だよ。みんな、神さまはそんなものは棄ててくださるから」

と。それを全部、してくださったのはキリストなんだけれども。

さっき言ったイザヤ書がこれです、第十巻の「8月2日」のところだ、

「1ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、イスラエルよ、汝を造った者今こう言い給う、『恐れるな、我は汝を贖った、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。』」（イザヤ43・1）

と畳かけて、現実を言っているんですよ、神さまは。「そのうちにしてやるよ」じゃない。

「25我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない。」（イザヤ43・25）

「我自らの故に」ですよ。「お前のために」じゃない。これが本当に神本位の福音の世界なんです。

「21汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。22我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。汝われに回帰せよ、我れが汝を贖

ったのだから。」（イザヤ44・21）

「罪を散らしたから帰って来い」

というんだ。「帰ってきたら罪を散らす」のではない。

「回帰せよ、帰って来い」

「私は帰らざるを得ません、あなたの所に飛んで行きます」

という気持でしょう、こういう恩寵の言葉でもって裏づけられたら。

「帰って来いなんておっしゃらなくたって、行きますよ」

と。

「贖ったのだから、帰って来なさい。キリストの十字架が私たちをもう完全に贖ってしまっているんだから、何をゴタゴタ言っているか」

と、こういう話ですよ。

「それでも私は……」

なんて、なぜそんなことを言うか。どこへ行くんだ。キリストの他どこへ行くんだ。自分の実存の在り方を顧慮することは要らない。そんなことは気にしなくていいから。気にするのはキリストだけなんです。キリストにだけ戻って行けば、そんなものは知らない間に消えていくんだ。そうして、

「楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない、光が来てしょうがない、人を助けたくてしょうがない」

という、「しょうがない人」になるんだ。

●ざるを得ない

「しょうがない」といえば、『エン・クリスト』40号（１９８９年10月秋季号）の「グラッドストーンの如く」のところに書いたでしょ。そういう、

「しょうがない人間になれ」

と。西郷南洲の言葉に、

「人を相手にするのではない、天を相手にするのだ。生命も要らぬ、名声も要らぬ、官位も金も要らぬ、という人間はどうにも始末に困るものだ。この始末に困るような人間でなければ、艱難を共にして国家の大問題を解決してゆくことはできるものではない。」

とある。やっぱり西郷南洲だね、こんなことをピシャッと言う人だから。

人生は、そういう上からの聖言に圧倒されながら、勇ましく進まざるを得ない。絶対に行き詰まりませんから。

「今日は私はちょっと調子が悪いから集会へ行くのを止めよう」

なんて、何を言っているか。調子が悪かったら出て来なさい。お客さんが来たら、お客さ

んを連れて来たらいい。

「お客が来るので今日は行けません」

と、何言っているか。お客に対して、

「日曜日はダメですよ」

と言えなくては。でもそれは律法としてやっているんじゃない。私たちは、日曜はキリストに会わざるを得ない――それは毎日のことだけども――聖書の世界に行かざるを得ないとやっているわけだ。全部、「ざるを得ない世界」です。「アンナケー」「天的必然」ということ。そういう、天法、天的必然によって動いているのが本当の自由の世界なんです。天衣無縫に動いていたのがキリストだ。ユダヤ教の律法なんかキリストは勝手に破っている。だから、怪しからんと言われるわけだ。けれども、

「実は本当の意味では、律法の一番深いところは、私は満たしているんだ」

というわけです。

「天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一点、一角も廃ることなく、ことごとく全うせらるべし」（マタイ5・18）

と、キリストが言われた、ああいう言はそういう意味です。十字架に懸けられるわけだよな。ご利益教と思った民衆もダメ。ローマの兵隊もダメ。弟子たちもダメ、まだ聖霊が来てないんだ。ただ女の人たちが本当に幾人かはキリストに付き従っていた。マグダラのマリヤなんかはその筆頭だ。

ドイツのある詩人の言葉に、

「女性には一人称がない」

という言葉がある。女性は"das Ich"（ダス　イッヒ、私）がないと。

「本当に相手に自分を投げかけて尽くす、それが女性の姿だ」

という。キリストがその女性道なんだよ。神さまにすっかり投げかけている。本当の女性道はまた本当の男性道なんです。もの凄い力が来るから。だから、本当は、

「男性道女性道これ一如なり」

というわけです。完全に受身になると、そこから本当の能動が出てくる。私みたいな生まれつき弱虫はそれでなければダメなんだよな。持ち前の元気をだせと言われたって、ありはしない。

●相互帰入

旧約のゼカリヤ書1章3節に、

「3…**万軍のエホバ言う 汝ら我に帰れ、万軍のエホバ言う 我も汝らに帰らん。**」

（ゼカリヤ1・3）

「お前たち私に帰って来なさい、私もお前たちのところに帰るよ」

と。楽しい言葉だね、これは。

「あんた来なさいよ、私もあんたの所へ行くよ」

というわけだ。神さまがそう言っているんだ。

「お前たちの所に帰る」

ということは、

「お前たちの所へ行くよ。方向をそっちへ向けるぞ」

ということ。あるものから別な方向へ行くことも、この「帰る」という字なんですよ。あるものの方へ行くのも、あるものからずれるのも、どっちもこの「シューブ」という字なんです。面白いね、ヘブライ語というのは。

「シューブー　エーワイ、アッシューブ　アレイカ」

「私にお前たち帰って来なさい、私はお前たちの所に向き直って行くよ」

と。相互帰入なんだ、お互いに帰入しちゃう。非常に仲の良いはなしだ。それはそうですよ。キリストは天界から降りて来たんだ。我々はキリストの許へ行く。

「お前たちの所へ来るよ、お前も来なさいよ」

と。これが福音の世界です。キリストの方から降りて来たのが先なんだよね、天から降りてきた。

●キリストの義を賜る

ガラテヤ書2章16節、

16 **人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。**

こういうことを一生懸命でやっているんだよな、プロテスタント神学でも何でも、お説教でも。

「人の義とせらるるは律法の行為に由らず」

律法の行為をどんなに立派にやったって、それは義といわれない、義とされない、義しいとされないという。

「唯キリスト・イエスを信ずる信仰によって義とされる」

それはキリストが義人なんだから。本当の意味で律法を全うしたのはキリストだけなんだ。神さまの御意を完全に体現した。それが義なんです。神さまの御意をそっちのけにして、ただ書かれた律法を外側からいくら守ったって、それは本当の義じゃない。生命も何もありはしない、苦しいばっかりだと。いわゆる道徳でね。決して道徳をただ形式とは言いませんよ、それは良心から発した結構な行為はあります。それはそれとして大いに評価していい。けれども、それは結局、生命的なものを持たない、何かご苦労さまという世界だな。福音でなければそういうところに来ないから。

もともと「義とする」という言葉は、裁判の上からそれを義しとする、罪でない、不義でない、義だ、というようなところから、もちろん、法的な意味から来ているでしょうけれども。宗教的な意味では、本当にそれを恵みとして義とされることが、恵みと、恩恵を与えることと同じことになる。これはイザヤ書に出てくる。

「神の義が福音にあらわれた」

とパウロが言ったのはそのことなんです。

ところで、あなた方は、これで満足しますか、私は満足しない。

「キリストを信ずる信仰に出りて義とせられん為なり」

と。義とされて、どうするんですか。私は義とされたってしょうがないな、

「キリストを信じて義とされた」

なんて言われても。

「ああ良かったな、義とされて結構でした」

と、普通の信仰はみなそれでおしまいだ。私は義をいただけなければ承知しない。キリストの義をいただけなければ。「義とされる」じゃなくて、義を賜らなければ。キリストを本当に信受すれば、

「義をいただく」

のだから。

その義の内容は聖霊なんです。マルチン・ルターもそこまで言ってない、私はルターの註解を見たけれども。だから、プロテスタントの

「義とされる」

なんていう言葉は気にくわない。義を賜らなければ、キリストの義を賜らなければ。キリストを受けとっていて、キリストの義をたまわらないでただ義とされたとは、どういうことですか。そこは、いわゆる文法を破る。いわゆる文法の奥の世界を見るんです。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロは言ったが、霊をもって読むんです。

「キリストの義を、義人の義をたまわる」

それは、内容的には聖霊がもっている義なんです。聖霊はすごいよ、義でもあるし、愛でもあるし、智慧でもあるし、生命でもあるし。キリストの内容なんてものは、

「こうこうでございます」

なんて箇条書きしたってどうにもならん。

●新しき律法

ユダヤは律法があったため、神さまとの根本関係がむしろ薄れていった。律法がない方がむしろ良かったくらいだ。そこは、預言者はいきなりその世界を歩いてた。律法の奥の

世界を預言者は歩いていた。だからキリストは預言者の系譜から来ています。預言者エレミヤは、神さまとの関係を、

「私はねじふせられた。もう言うのは止そう。ところが、骨の中に火の如きものが燃えて忍ぶに疲れて堪え難し、神の言を言わざるを得ない」

と言ったでしょ。あれは本当に神の御意を、言を、火として、生命として受けとって告白しているわけだ。あれが本当の義の世界なんです。

「新しき律法をお前たちの心に置く」

と、さすがにエレミヤは31章のところでそのことを宣言した。今までのとは違うよと。これが福音への預言です。

第十巻の「7月18日、19日」のところだ。あんた方、少しバカになって、この本を読んでくださいよ。食らってくださいよ。私はこの一巻を書いたらいつ死んでもいいと思ったものね、本当に。だから、「万人に捧げる」と書いた。

19 **我は神に生きんために、律法（おきて）によりて律法に死にたり。**

そのとおり。本当の意味で、

「律法には自分はもう死んだ。そんなものは相手にしない」

と。律法は本当の意味で人を活かすものだと書いてあるでしょ、

「律法は聖なるものにして…」

と。これはパウロ自身もロマ書で言っているんだ。本当の意味で律法は聖なるもので、モーセの十言は本来は、これを本当に内側から満たせば永遠に生きる、死なないというまでのものを持っている。それをみんな取りそこなっているわけだ。けれども、守っているようで実は守っていない。

「自分は、この律法はとても本当の意味では行えないということで、律法に死んだ。それは神に生きるために死んだんだ。どうして神に生きることができるか、キリストを受けとってからだ」

と、こういうことなんです。

私の先生の藤井先生が一生懸命で道徳のことをやった、

「道徳、道徳」

と言って。けれども、

「私の口からもう道徳なんて言いたくなくなった。キリストの恵みが本当に自分に身についたら、もう道徳なんてことは言えなくなった」

と、いつかのクリスマスの感話で言っておられた。ということは、いい加減な勝手な生活をしていいということじゃないですよ。おのずから、本当の道を歩くようになるということです。よく、クリスチャンでも本当の意味で非常に礼儀を守らない人があるよな。

「汝らの義、学者パリサイ人にまさらずば…」

とキリストが言ったのはそのことです。パウロがロマ書12章で言っているのがそのことなんです。いわゆる人間的な立派でない。けれども、そこは本ものの世界だ、本ものの道を歩いているなぁと。

「我は道なり」

という、

「その道に沿っている、即しているなぁ」

ということになっていくわけです。人間だから躓いたり転んだりしますよ、いいですよ。けれども、必ず本当の軌道を進んで行く、行かざるを得ない。ドイツ語でいうと、"Gesetz erfüllen"（ゲゼッツ　エアフュレン）「法を満たす」んです。

●ガラテヤ2･20とマタイ5･3は同じ

20**我れキリストと偕(とも)に十字架せられたり。**

「私はもうキリストと一緒に十字架されました。キリストは私のために完全に自我をすっとばしてくれました。イザヤ書53章そのものをしてくださいました。もう私は生きていたって、生きているんじゃありません」

と。相対的人間パウロは生きてます。けれども、本当のパウロはそんなところでは生きてない。本当のパウロの生命はキリストの中にある。わが中にあるキリストだというわけです。

最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。

とはそのことです。もちろん、このキリストは御霊のキリストです。

「聖霊のキリストが、キリストの聖霊が私の中で生きている。全世界といえども、これを否定するわけにはいかん」

というのが、我々一人一人の告白でなければならない。ガラテヤ書2章20節がそれなんです。ガラテヤ書2章20節がマタイ伝5章3節と同じだということを、まず私の他はおそらく言ったことはないでしょうね。

「恵福(さいわい)なるかな、霊の貧しき者――私の十字架でお前は霊がゼロにされた、貧しくされた者――天国即ち聖霊の我れ汝の中(うち)に在り」

と響いてきた。本当だもの、これは仕方がない。畳の上に私は平伏した。阿蘇で一回、それから自分で独りで一回。あなた方も何かで決定的な経験をしてくださいね。ただ体験という現象を言っているんじゃないですよ。

「知らない間にそんな世界に入りました」

と、それで結構です。

最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。

アーメン、ハレルヤです。私はパウロと一緒に語っているんだからね、「について」語っているんじゃない。

「聖書はドラマで、その中に自分を投げ入れて、そこからものを言いましょう」と言っているでしょ。あなた方も、聖書について説明なんかしないでくださいよ。マルチン・ルターの、『クリスチャンの自由について』(Von der Freihait eines Christen menschen) のあの「Von」(フォン)「について」は要らないんだ。「クリスチャンの自由とはこういうもんだ」という告白だということです。よく論文で、「何々について」というのがたくさんあるよな。

今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

この「肉体」という訳し方はよくない。

「エン・サルキー」(εν σαρκι)

だから、「肉に在りて」と訳した方がいい。「肉体」という言葉は別な言葉があるんですから。この場合は「肉体」と訳しても間違いとは言えませんけれども、「生まれつきの身体、生まれつきの存在」のことです。「わが身を捨て給いし」とは十字架のこと、「贖罪によって」ということです。

「わが身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり」

とは、別な言葉でいうと、

「キリストの贖罪で生きている、神の子を信受して生きている」

ということ。

ガラテヤ書3章、

1**愚かなる哉(かな)、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前(めのまえ)に顕されたるに、誰(た)が汝らを誑(たぶら)かししぞ。**

面白い言葉だね。これは本当に、

「十字架につけられ給いしままなる」

と、そういう訳し方でいいんです。

「エスタウローメノス」(εσταυρωμενος)

という言い方です。「愚かなる哉、ガラテヤ人よ」と、この「愚かなる哉」という言い方は、ドイツ語では「ウンフェアシュテンディゲン」(unverständigen)「どうも分けのわからない」と訳してありますけれども、この言葉の中にパウロの非常な嘆きと憤りとどっちも入ってますね。「せっかく福音を受けとっておいて何だ」というわけだ。

「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに」

十字架は一回であるけれども、一回の事実は毎日現実として現れてくる。本当の過去の事実は、今に生きている。でなければ、

「そうですか、二千年前にキリストは十字架に懸かりましたか」

と、それではちょっと物語になっちゃう。

「今もなお、我々のために十字架に懸かっておられる。また我々のために復活しておられる」

と。全部、現在完了です。事実で裏づけられたところの現在なんです。

「またユダヤ教にお前たちは帰るのか」

と言って憤慨しているわけだ。

「汝らを誰が誑(たぶら)かしたか」

と。

●一如的な現実

2我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為(おきて)(おこない)に由るか、聴きて信じたるに由るか。

これは直訳すると、

「信仰を聴きたるに由るか」

と訳したい。「聴きて信じたるか」ではない。「信仰を聴きたるに由るか」ということ。キリストの信仰ですよ、キリストの信を聞いたから。直訳すると、

「信仰の聴取によるか」

と、ギリシャ語の使い方はそうなっている。

「エクス　アコエース　ピステオース」（εξ ακοης πιστεως）

ですからね。信仰の現実を聞いた。パウロ自身も、そのことなんです。パウロ自身が本当に自分の信仰を告白した。だから、

「御霊を受けたのは、私の信仰を聞いたによるのではないか」

と。「聞きて信じたる」ということも、まんざら間違いではないでしょうけれども、もっとはっきりとしては、

「信仰の現実を聞いた。それで、参ったと言って、聖霊を受けた」

と。そうだよ。聖霊は、相手が本当に信仰の現実を告白して、それに打たれるんだから。

3汝らは斯(かほど)くも愚かなるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。

これは「肉」でいい。

「それを生まれつきの自分というようなもので全うされるか」

と。

4斯程(かほど)まで多くの苦難(くるしみ)を受けしことは徒然(いたずら)なるか、徒然にはあるまじ。

たくさんの苦難を受けて、そして何のかんの言われたら、いろんな事にでっくわせば、逆に聖霊の力は働き給う。これは本当ですよ。私はもうはっきり皆さんに申し上げる。何でもごされと。すごいよ、これは、次元が違うからね。だから、キリストが、

「お前たちを虐げる者のために祈れ」
というのはその通り。人を憎んでいたら聖霊は働かない。困ったもんだね。
「キリストに本当に向かいて、キリストに本当に帰りなさい」
と言いたいんだ。
「お前たちの所へ帰ってくるよ」
と、キリストの方で言ってらっしゃるんだからね。

5 **然らば汝らに御霊を賜(たま)いて汝らの中に能力(ちから)ある業(わざ)を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。**

御霊がやってくると、力ある業が――御霊を与えること自身も力ある業ですけれども――力ある業がそこに展開してくる。それは、

「信仰を聴くに由るか、信の事態を聴くによるか」

と。これは、聴受、聴き受けとる。ただ聴いたってダメ。信じ受けとる。信受です。帰入、祈入。この一如的な現実がこの「神秘」の世界なんです。「パウロ的実存の秘密」というのは、そこに在る。観念でない。
「キリストわが中に」
という、我々の雑誌の標題は正にそれなんです。これをお題目にしちゃダメですよ。
「エン・クリスト」
というギリシャ語を見たら、もう直ちに祈の世界に入って、キリストの中に入っていなくては。眠くはなるよ、だけれども疲れない。
「ああ今日は疲れちゃいました」
なんて、そんな事はないんだ。

6 **録(しる)して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。**

と。「その行為を義とされた」とヤコブ書にある。というのは、アブラハムにおいては信即行だから。
私はむかし永いこといわゆる観念信仰でね、
「信仰のみ」
と言って、「自分たちの信仰」というものが「サムシング」（何ものか）になっていた。そんなものじゃないんだよな。
キリストの信、キリストの愛、キリストの望、それに圧倒されながら受けとっていくだけの話です。全存在で受けとっていくだけの話です。それは、みんな聖霊がそこで力をもって働く。
では今日は、そこまでとしますが、また明日を楽しみにしてください。これだけの基礎がないと、明日の話にならない。